

新しい薬の開発にどれだけのコストと時間を要するのか。日本製薬工業協会によると、数百億円から数千億円の費用と10年以上の期間が必要とされ、ある化合物が薬として発売される確

ふう 楓との 約束

41

薬都プライド

率は3万分の1、わずか0.003%と言われる。「ひと握り」という表現も当てはまらないような、難易度の高い挑戦だ。そんな新薬開発に貢献しようとして取り組んだ寄付講座がきっかけで、富山大にあった。免疫学の第一人者で、東京大の退官に合

第5部 次代を見据え 9



研究作業を見守る長井教授（中央）
＝県立大

産学官で創薬に挑戦

わけて県薬事研究所（現・県薬事総合開発研究センター）に招かれた高津聖志所長（77）を中心に、2007～18年度に活動。高津所長は「産学官連携の成功

例だと思っている」。

免疫バイオ・創薬探索研究講座は、県と製薬会社の出資によって設けられた。

市販薬の3割は植物由来であることや、「くすりの富山」が生薬を扱ってきたことなどから、免疫の制御に関係する天然物の探求をテーマの柱の一つに

抑える効果があることを突き止めたほか、土壌菌の抽出物から免疫を活性化させる物質を発見。着実に実績を積み上げた。研究に没頭しただけでなく、研究員を官民から受け入れて人材を育成。研究用の資機材を外部に提供したり、メーカーの技術指導や共同研究に取り組んだりもした。

を受けて甘草成分の活用法を探ったり、競争的研究費を獲得して免疫疾患の難病「全身性エリテマトーデス」の治療薬開発をテイカ製薬（富山市）などと進めたりしている。

「医薬品になり得るシーズ（種）を発見し、磨きをかけることができれば、県内メーカーに注目してもらい、大型の研究費獲得も期待できる」と長井教授。産学官がうまく連携できれば、富山でも画期的な創薬は不可能ではない。第5部おわり（取材班・中谷蔵、土居悠平、藤木優里）

第6部は近く始めます。

連載への感想や意見をお寄せください。北日本新聞社「楓との約束」取材班まで。〒930-0009 富山市安住町2-14。メールは kusuri@kitanippon.jp

据えた。免疫システムの異常を原因とする病気の予防や診断、治療に役立つ研究のほか、新薬開発を進めることを目指した。「支援企業から研究に対して注ぎが入ることがない分、ものすごい責任感があった」と高津所長。学術的な基礎研究と、創薬に結びつくような応用研究を両立させ、甘草の成分にメタボリック症候群や糖尿病の原因を

12年間の研究成果は、県内で受け継がれている。県立大の長井良憲教授（62）はその一人。高津所長と共に東京から富山に移り、寄付講座の担当教員を務めた後、新設の県立大工学部医薬品工学科に研究室を構えた。現在は産学官でつくる「くすりのシリコンバレーTOYAMA」創造コンソーシアムの支援